

創作ノート

リュック・フェラーリ《トートロゴス III》遠隔演奏の実践
Remote Performance of Luc Ferrari's "Tautologos III"

佐藤 亜矢子

Ayako SATO

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

渡邊 愛

Ai WATANABE

東京藝術大学

Tokyo University of the Arts

概要

リュック・フェラーリは、ミュージック・コンクレート作品《トートロゴス I》(1961) から、オーケストラとサンプラーのための《トートロゴス IV》(1997) まで、4 作の《トートロゴス》を作曲した。トートロジーを語源とする題名の通り、反復を題材とした作品群である。3 作目にあたる《トートロゴス III》(1969) では、複数の演奏者が任意の楽器やオブジェや身体を用いて、行為 Action と沈黙 Silence を繰り返す。Action と Silence の内容とその持続時間は演奏者自身で決定し、各々が一つのサイクルを形成する。共演者の Action と Silence の内容や状況を意識することで、演奏者は自身の Action の内容を変容させていく。2020 年 8 月から 10 月にかけて、筆者らを含む 6 名の演奏家が、この作品の演奏をインターネットを介して遠隔で実践した。日本とイタリアの各々の場所から演奏者が参加し、ウェブ会議ツールや遠隔演奏システムを用いてライブ配信と収録版の配信を行った。通信状況による不具合が発生しながらも、オンライン空間で演奏の場を共有する新しい感覚と共に、シンプルな規則を持つこの作品の多彩な解釈を現出させる結果となった。

Tautologos III was composed by Luc Ferrari in 1969. The *Tautologos* series, which includes four works from the musique concrète piece *Tautologos I* (1961) to *Tautologos IV* (1997) for orchestra and samplers, is based on the theme of repetition. In *Tautologos III*, several performers repeat the action and silence using any instrument, object, or their bodies. The content and duration of the actions and silences are determined by each performer, who form their own cycles. By being aware of the content and circumstances of the actions and silences of other performers, they amend the content of their own actions. We performed this piece remotely via the Internet. Musicians from Japan and Italy participated in the live and recorded performances of the piece using web conferencing tools

and a remote performance system. Despite connectivity issues, we came up with some interesting results, a new aesthesia of sharing a performance space online, and a variety of interpretations of the simple rules of this piece.

1. フェラーリと反復

反復はリュック・フェラーリ Luc Ferrari (1929-2005) の作品を考える上で重要なキーワードの一つである。彼は自身の創作における反復について語るとき「月曜日は他と同じような日だが、肉屋は閉まっている」(Ferrari 1996) と日々の繰り返しを引き合いに出す。また、毎日同じ時間に乗車する地下鉄の同じ車両で出会う人々や出来事を挙げる。それはまったく同一の事象がループされるのではなく「反復とは、だから類似性と非類似性もまた存在する場所である。すなわち、同じフレーズを二度繰り返したとしても、それはもはや同じ瞬間ではないのである」(Ferrari 1996)。こうした証言から分かるように、フェラーリの音楽における反復は、ミニマル・ミュージックとは異なる。「アメリカの反復音楽の徹底的な機械的動きとは何の関係もない」(Caux 2002) とジャクリヌ・コーも指摘するとおり、1960 年代のアメリカ実験音楽に接続したものではない。フェラーリは作曲活動の初期段階で当時のヨーロッパ現代音楽の主流であったセリエリズムからの脱却を図ろうとした。1950 年代の時点でフェラーリは「セリーの手法の主動力であった絶え間ない変奏の代わりに」(Ferrari 1996) 反復の使用に着目する。例えば 1956 年のピアノ曲《ヴィザージュ I Visage I》では、セリエ的な要素と反復的要素が拮抗しており、サイクルとしてセリーが発展展開する。様々な速度で生活する個人が投影されたこのサイクルは、偶然性を包含したサイクルというフェラーリ特有の反復技法へと発展していった。1969 年に発表された《音楽散歩 Music Promenade》には、この用法の概念が強く反映されている。フェラーリがヨーロッパを旅する中で録音した素材を用いて作曲された

4つの電子音響音楽が、独立した4つのテープに収められている。それぞれを、部屋の四隅に設置したプレイヤーでループ再生するこの作品では、4つのテープの持続時間が異なるために、鑑賞者はその瞬間ごとに偶然的な音の重なり合いを聞く。一つ一つのテープは単純な再生を繰り返すに過ぎないが、鑑賞者が自由に部屋を出入りできるインスタレーションとして鑑賞することで、各鑑賞者がその時々により現れる音のぶつかりあいや沈黙に遭遇する。こうして上演の過程における偶然性として不確定性が導入されるものの、フェラーリはシステムとして反復や不確定性を取り込もうとしたのではなく、日常に現出する反復や偶然の様相を作品に転用することを試みたものと推察される。このような日常の様態への関心は彼の「逸話的音楽 *musique anecdotique*」とも共通する。逸話的音楽とは「ミュージック・コンクレートの作曲技法である録音物の抽象化という方向性から引き留まって、録音対象の持つ意味や文脈を顕わにする試み」(渡邊 2015)であるが、代表的な作品の一つに電子音響音楽作品《ほとんど何もない第一番あるいは海岸の夜明け *Presque rien no.1 ou le lever du jour au bord de la mer*》(1967-70)が挙げられる。20分間海辺の環境音が継続するこの作品は、フェラーリがヴァカンスで訪れた漁村の夜明けを日々観察する中で発見した、日常的出来事の反復に対する興味によって導かれたともいえる。

2. トートロゴス

《音楽散歩》同様にこうした思考が反映された代表的な作品として《トートロゴス *Tautologos*》シリーズがある。2作のミュージック・コンクレート作品《トートロゴス I, II》(1961)から、オーケストラとサンプラーのための《トートロゴス IV》(1997)まで全4作に共通する要素は、トートロジーを由来とする曲名からも想起される通り、反復である。3作目にあたる《トートロゴス III》あるいは私と同語反復するのはいかがですか? *Tautologos III ou Vous plairait-il de tautologuer avec moi?*》(以下、副題略)は1969年に発表された。楽器や奏者数の指定はなく、楽譜はテキストで示される。フェラーリは作品解説において「トートロゴスとは何か? それはいくつかの現象の重ね合わせであり、継続的に繰り返され、それぞれが異なる持続時間を持ち、常に新しい順序で出会う」(Ferrari 1969)と述べる。複数の演奏者が任意の楽器やオブジェや身体を用いて、楽譜に記された規則に従って「行為 *Action*」と「沈黙 *Silence*」を重ねてゆく。*Action*は*Silence*より短い持続時間である必要があり、各奏者は*Action*と*Silence*の持続時間を自身で決定する。持続時間をカウントする方法は選択可能とされる。つまり、機械的手段で正確に計測することもできれば、機械に頼らずに頭の中

で1,2,3と数えることもできる。持続時間は終始変更してはならない。*Action*には、一般的な楽器の演奏のみならず、オブジェを用いたり身体の動きによる表現も含まれる。どのような*Action*を行うかは各人に委ねられ、それは、持続、音域、ダイナミクス、奏法、音色、発展、速度という7つの尺度を組み合わせたものとなる。*Action*と*Silence*のサイクルは幾度も繰り返される。各々が個々のサイクルを形成するが、共演者の*Action*と*Silence*の内容や状況を意識することで、演奏者は自身の*Action*の内容を変容させていく。フェラーリは1965~73年頃までテキスト楽譜を用いており、テキスト楽譜による作品を「他者のアイデアを自分のものにしようとしている、人々のグループとの間のコミュニケーション」(Caux 2002)と捉えていた。《トートロゴス III》における*Action*の変容は、まさにこの「コミュニケーション」として演奏の鍵を担う。

2.1. 近年の《トートロゴス III》実践例

楽器編成に制限がないことに加えて演奏を行う場所も自由度が高く、《トートロゴス III》の上演会場はコンサートホールに限られない。「非伝統的な部屋で」行うことが可能だと作曲者自身が指示する通り、実際、過去には様々な場所で上演されている。例えば、2017年9~10月にはミラノのERRATUM ギャラリーにてフェラーリのフォトコラージュやドローイングが展示された展覧会が行われ、その最終日に《トートロゴス III》が演奏された。一つの展示室からなるごく小さなギャラリーである。壁に写真や絵が展示された狭い空間で、7名が楽器やコンピュータやオブジェを手にし、一部の演奏者は演奏の最中部屋の内部を歩き回った。これは会場の狭さゆえ観客を入れずに行われ、のちに演奏動画が公開された。いっぽう規模の大きな例としては、2016年11月11日にデンマークで行われたDefine Festivalでのコンサートが挙げられる。55名のオーケストラ奏者とクリストフ・シャルルによるコンピュータプログラミングという編成で上演された。各演奏者は同コンサートのプログラムにあったモーツァルトやマーラーそしてブラームスの交響曲から小節単位で断片を抜き出し、反復した。また、ミラノでは2018年3月10日にも上演が行われた。会場となったアルセナーレ劇場Teatro Arsenaleは1272年に建造された元礼拝所である。音楽家のみならず俳優も加わった。この催しで、俳優たちは*Action*として傘や旗を使った身体表現や走ったり転んだりなどの演技をし、身動きせずにその場に立ちあるいは座って*Silence*の時間を表現した。2019年末には筆者らが東京のライブハウスで、武蔵野美術大学ではシャルルの授業内で映像学科の学生が演奏するなど、日本国内でもコンサートホールを離れた場所での演奏が行われている。

2.2. 《トートロゴス III》遠隔演奏

「非伝統的な部屋」を拡大解釈するならば、オンラインというヴァーチャルな空間でも演奏が実現できるのではないだろうか。2020 年春、新型コロナウイルス感染症の流行によって、フィジカルに人々が一つの空間に集合して演奏を行うという従来の標準的な音楽の営みが、世界中で拒絶されてしまう事態に陥った。多くの音楽家らが新しい手段や表現について考えざるを得ない状況となり、コンサートや演奏配信などウェブ上での音楽実践が活況を呈し始めた。そのような中で筆者ら 6 名は、オンライン空間という「非伝統的な」場所において《トートロゴス III》の遠隔演奏を実施した。演奏者それぞれのサイクルの時間や演奏内容は個々で検討した上、事前の打ち合わせにて調整を加えた結果、持続時間と内容の異なる 2 回の演奏を行うこととした。

度重なる議論とリハーサルを経て、まずは 6 名の音楽家（倉垣卓磨、佐藤亜矢子、Gak Sato、柳沢耕吉、李英姿、渡邊愛）が東京、長野、ミラノの各々の場所からアクセスし、フェラーリの命日である 8 月 22 日にライブ配信を実施した。ウェブ会議ツール Zoom と、YAMAHA による遠隔演奏アプリケーション SYNCROOM を用い、配信協力者によって YouTube でリアルタイム配信された。演奏者間のコミュニケーションは問題なく行われたものの、動画と音声とを別系統で伝送したことや、同時刻に大型音楽フェスティバルのライブ配信が行われていたこともあり、安定した配信には至らなかった。この失敗を踏まえて、翌月に改めて収録を実施した。通信に負荷のかからない方法を再考し、Zoom のみを用いた。音声は各個人が録音し、最終的に Zoom 録画と結合、編集して YouTube での配信に至った。2 回目の演奏途中に一名のネット接続が切断されてしまうハプニングはあったものの、コンテンツとして不完全なものとなったライブ版と比較して、作品の魅力や遠隔ならではの醍醐味を引き出すことに成功した。収録版は、フェラーリの 92 回目の誕生日である 2021 年 2 月 5 日まで期間限定で公開することとした。

自室で演奏に参加できることから、部屋に置かれた物を用いる Action も選択された。ギタリストの柳沢耕吉が 2 回目の演奏に使ったのは書籍だった。本棚から書籍を手に取り、ページをめくって、閉じ、本棚に戻す一連の行為である。偶然棚にあったものではなく、書籍は「紙の質感（めくる音）、閉じる音、カバーの柔らかさ（持つ手から出る音）」などを考慮し、柳沢が選んだ。そこにはフェラーリのみならず、フェラーリが師事したオリヴィエ・メシアン、フェラーリが影響を受けたエドガー・ヴァレーズに関する書籍も並んでおり、書籍そのものの質感や音といった理由に加えた二重の意図が見える。さらに、この Action にはそれ以上の意味が重なる。2005 年 7 月、没する 1 ヶ月前にフェラーリは、かつて自身が設立した組織である回路の詩

神協会 La Muse en Circuit のスタジオにて《トートロゴス III》の演奏を録音していた。その中で、フェラーリの提案により二人の演奏者が本を同時に閉じて音を出していたのである。「La muse en Circuit に行ったとき壁に色々な本が並べられていたのが印象的だった」とも語る柳沢は、フェラーリがかつてその場所で選択した Action をなぞることでフェラーリへのオマージュとした。

佐藤亜矢子は、自室にフェラーリのレコードや CD、DVD を多数置き、2 回目の Action に用いた。レコード類を手に取り、パッケージから中身を出して、その後しまい、元あった場所へ戻すものである。柳沢同様に、自室であるが故に実現した Action といえる。レコードは当然、プレイヤーがあつて初めてその円盤に書き込まれたデータが実際の音として可聴化されるわけであり、パッケージから解放させたところでフェラーリの作品が現出することはない。この動作は、円盤に閉じ込められたフェラーリの時間空間を解放し、音楽へと変換させることのメタファーとして選択した。また、これはレコードを手を取る動作の前にコンピュータから再生した音と結びつけている。Action の冒頭で、コロナ禍における都市封鎖により部屋に閉じ込められていた時期に録音したパリの環境音を鳴らした。外出許可証を携えて外に出た際に聞いた鳥の声は、外出制限からの束の間の解放という佐藤のごく個人的な記憶に接続している。パリはフェラーリが生きた地である。フェラーリのいない 2020 年のパリでの「束の間の解放」を思い起こす音から開始した Action は、フェラーリのレコードを「解放」させる儀式へと繋がり、そつと元へ戻すことで締めくくられた。

倉垣卓磨は 1 回目、2 回目ともに自らの姿を隠し、コンピュータの画面と操作する手のみを Zoom に映し出した。共演者や鑑賞者から見れば、いわば画面（Zoom）の中に画面（コンピュータ）が存在している入れ子状態である。照明が落とされた部屋でコンピュータの画面とクーラースタンドの LED が光を放つ。無機質な Zoom 画面の中に、操作する倉垣の手が現れて Action が始まり電子音が鳴る度に、コンピュータ画面上では波形が勢いよく動き出す。しかし Action は短く、またしばらく長い Silence として、画面の中にある画面と冷たい LED の光が身動きもせずにとどまる。倉垣の選択した一連のサイクルもまた、一般の上演会場では体験し難いものだろう。演奏するコンピュータの画面をスクリーンに映し出すことの多いライブコーディングなどとは違った性質のものであることは言うまでもない。

渡辺愛は、2 回目の Action でフェラーリの最晩年の電子音響音楽《不整脈＝非リズム的なもの Les Arythmiques》(2003) を引用した。フェラーリが来日した際に飲食店で録音した音が使用されているこの作品では、

店内で従業員たちが発する「ありがとうございました」等の日本語が特徴的な要素として現れる。録音された場所である日本で再び音源を再生することで、録音者フェラーリから長いスパンを経てサイクルを受け取ったといういささか夢想的な解釈もできるが、演奏者の Action が行われる場所が問題となるのは、遠隔で合奏しインターネット上で配信されるという非伝統的な演奏状況が引き起こしたものである。

二胡奏者の李英姿が2回目の演奏に用いたのは、酒の空容器と炭酸飲料の入ったペットボトルであった。容器を振る、蓋を開ける、コップに水を注ぐといった Action は、演奏というよりも日常生活の中でのたわいのない振る舞いそのものであり、フェラーリの日常の様態への関心が自然に反映されたものとなっていた。

先述したミラノのアルセナーレ劇場での上演に参加した Gak Sato は、1回目はテルミン、2回目は音叉による Action を行った。テルミンは、長いポルタメントが演奏可能であることや音色において李の二胡との類似があり、特にこの二人の Action が影響し合う様子が聞けた。それにより、テルミンが電子楽器（倉垣、佐藤）と生楽器（柳沢、李、渡辺）のパイプ役を担っているかのような感覚があった。音叉で参加した2回目には、ミラノのコンサートで演奏者らが着用した、胸に TAUTOLOGOS III と書かれた T シャツを着用していたことが印象的だった。



図 1: 収録版 2 回目の演奏のスクリーンショット

3. まとめ

Action と Silence を繰り返すという単純な規則によることから《トートログス III》の演奏には様々な可能性がある一方、自由度が高いとはいえ、ある種の厳格さを備えているともいえる。演奏の最中にはからずにも出現する長いゲネラルパウゼやトゥッティなどは、その結果の一つだろう。一見すると不自然なそれらは瑕疵ではなく、演奏者がサイクルの持続時間をコントロールできない枠組みゆえの本作品の魅力である。お互いがいわば空気を読みながら演奏することで成立する即興演奏では起こり得ない現象であり、即興的に見える作品でありながらも作曲家の強力な意図がはたらいっていることが分かる。遠隔演奏であってもこの要素が希

薄になることはなく、今回の我々の演奏においてもしばしばこれらの現象に遭遇した。フェラーリ晩年の演奏録音を撮影した動画を見ると、本を閉じる音のみならず、作曲家自身が演奏者に対して細かく意見している様子が見られる。これは好きだ、それはあまり良くない、というフェラーリの明確な意図があり、演奏者は彼の描いた脚本に基づいて演奏を行うのである。《トートログス III》のテキスト楽譜は脚本であり、フェラーリはここでは脚本家として振る舞う。決して完全に自由な作品ではないのである。フェラーリは 1970 年に《トートログス III》の別バージョンを発表しており、ここでは楽器編成とサイクルの持続時間と Action のモチーフを指定している。作曲家としてどこまで介入するのか、どこからをその外に置くのか、線引きをどのように捉えていたのかについて、今後引き続き調査する必要がある。

また、遠隔演奏でも通常の場合での演奏と同じように、互いの Action をコンピュータ越しに見聞きする中で自身の Action を変えていくことにも不都合は生じず、フェラーリが意図した演奏者間のコミュニケーションが十分にはかれた。

一方、本棚から書籍を手にする Action や、部屋に置いたレコードや CD を開封する Action などは、自室から参加する遠隔演奏でしか実現し得ない。LED の光が見える中でコンピュータの画面と操作する手のみを映し出す選択もまた同様である。筆者らの演奏は、多様な解釈が許容される本作品の一つのバリエーションとして提示できたのではないだろうか。また、通常インターネットを介することで発生する時間的遅延は遠隔演奏における障壁となる。しかし、本作品では全演奏者がそれぞれ決まった持続時間を保持するものとされ、厳密に共演者とタイミングを合わせて音を発することがない。そのため遅延が大きな問題となることがなかった。以上のことから《トートログス III》は遠隔演奏に適した作品であったと結論づけることができよう。

4. 参考文献

- コー, ジャクリーヌ. 2002. 『リュック・フェラーリとほとんど何もない インタヴュー&リュック・フェラーリのテキストと想像上の自伝』 (Jacqueline Caux. *Presque rien avec Luc Ferrari*. Nice, 2002) 椎名亮輔訳、東京：現代思潮新社、2006 年
- 佐藤亜矢子 2019. 『リュック・フェラーリ《ほとんど何もない》作品群における電子音響音楽』東京藝術大学大学院音楽研究科博士論文、2019 年
- 渡邊愛 2015. 『リュック・フェラーリの電子音響作品における逸話の構造』東京藝術大学大学院音楽研究科博士論文、2015 年

- Battista, Alba Francesca and Damiano Meacci. 2013. *Luc Ferrari, Tautologos I: The Crucial repetition*. International Computer Music Conference. Perth, Australia, August 11-17.
- Ferrari, Luc. 1996. "I was Running in So Many Different Directions," Translated by Alexandra Boyle. In *Contemporary Music Review*. 15/1 (1996): 95-102.
- Prinz, Eva. Marcangeli, Catherine. Moore, Thurston, and Ferrari, Brunhild. ed. 2019. *Luc Ferrari COMPLETE WORKS*. London: Ecstatic Peace library.
- La Muse en Circuit. 2020. *LUC FERRARI - 'TAUTOLOGOS III' [Interview]*. <https://youtu.be/6jAednUtjsI> accessed 28 November, 2020.
- Ferrari, Luc. 1969. ANALYSES / RÉFLEXIONS. *Tautologos III* (1969). <http://lucferrari.com/analyses-reflexion/tautologos-iii/> accessed 28 November, 2020
- Ferrari, Luc. 1999. ANALYSES / RÉFLEXIONS. *Music Promenade*. <http://lucferrari.com/analyses-reflexion/music-promenade/> accessed 28 November, 2020
- Ferrari, Luc. 1994. ANALYSES / RÉFLEXIONS. *Visage I* (1956). <http://lucferrari.com/analyses-reflexion/visage-i/> accessed 28 November, 2020.
- Charles, Christophe *news 2017*. <http://home.att.ne.jp/grape/charles/news.html> accessed 30 November, 2020.

5. 参考作品

- Ferrari, Luc. 1969. *Tautologos III*. Celle: Éditions Moeck.
- Ferrari, Luc. *Didascalies*. SUB ROSA, SR261 (CD+DVD). Released 2007.
- Ferrari, Luc. *Tautologos III / Havresac*. Interpreted by GOL & Brunhild Meyer-Ferrari. Collection PiedNU, PN0114 (CD). Released 2014.
- Ferrari, Luc. *TAUTOLOCAL - Tautologos III*. Concert of March 10, 2018 at the Teatro Arsenale, Milan, Italy. con-fine edizioni d'Arte & Cultura, (DVD). Released 2018.
- People, Places and Things. 2020. *Remote Logos performs Luc Ferrari's Tautologos III*. <https://youtu.be/Ae4VasocyuE> accessed 28 November, 2020.

Sergio, Armaroli. 2017. *ERRATUM Tv. LUC FERRARI TAUTOLOGOS III*. <https://youtu.be/Vq2uLKhfLjE> accessed 28 November, 2020.

6. 著者プロフィール

佐藤 亜矢子 (Ayako SATO)

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。リュック・フェラーリの作品研究で博士（学術）取得。現在、同大学専門研究員、玉川大学、東京電機大学、大阪芸術大学非常勤講師。

渡邊 愛 (Ai WATANABE)

東京藝術大学大学院博士後期課程修了。リュック・フェラーリ研究で博士号を取得（学術）。現在東京藝術大学、尚美学園大学、昭和音楽大学各非常勤講師。日本電子音楽協会理事。



この作品は、クリエイティブ・コモンズの表示 - 非営利 - 改変禁止 4.0 国際 ライセンスで提供されています。ライセンスの写しをご覧になるには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/> をご覧頂るか、Creative Commons, PO Box 1866, Mountain View, CA 94042, USA までお手紙をお送りください。